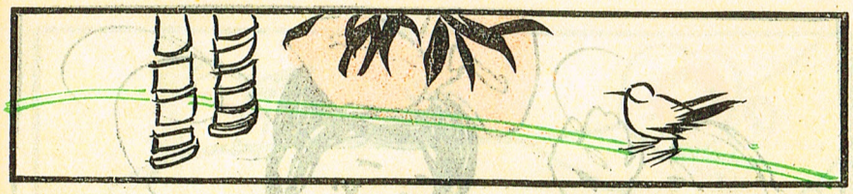


花枝さんの雪兎

花枝さんはいつでも日曜日には定つて、淺草だの、上野だの、日比谷だの、母樣と御一緒にお遊びに行くのですけれど、今日の日曜は、朝から曇つて居て、おまけに寒い風が吹き通して母樣はとても駄目だから、何處へも出掛けるのは止しにしやうと仰有います。ですけれ共、花枝さんは折角たのしんで待つたんですもの、止すなんて嫌で嫌でたまりません。

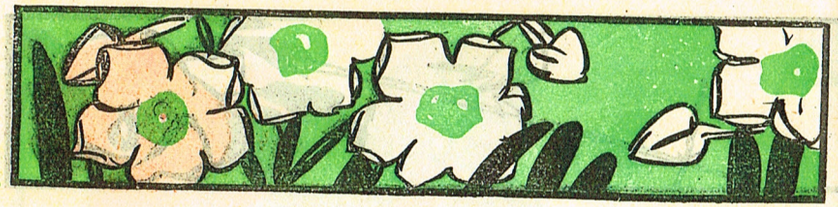
「お風をひくといけないから、早くこつちへ來ておあたりなさい。」

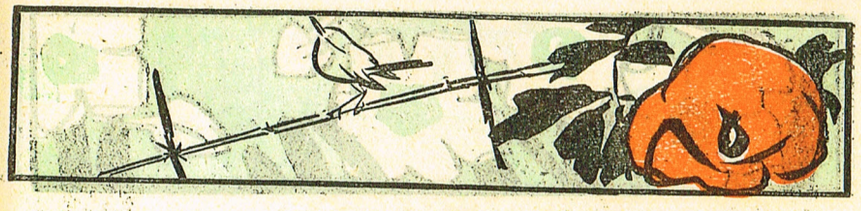
と、斯樣母樣が幾度となく仰有つても、わざとに聞かないふりをして、おもての格子戸にもたれて、じつと立つて居りました。

花枝さんのお家は表通ですから、いつもいろんな人が通つて行くのですけれど、今日は、つたに人通りがありませ。

「あさりむきみやい、むきみ——」

きたない、ぼろ〳〵の着物をきたむきみやの小僧が、寒さうな聲で呼びながら花枝さんの樣子を不思議さうにじろ〳〵見て行きますと、花枝さんはきまりが惡くなりました。





ビードロのやうにかじかんで、眞赤になつた兩方のお手々を、代る代るお口へ持つて行つて、暖かい息を吹き掛けながら、花枝さんは堪らなくなつて、茶の間へ歸つて行きました。

「寒いでせう、さあ、はやくおあたりなさい。」

母樣は長火鉢にかゝつて居た鐵瓶をおろして、火をかきたてゝ下さりながら、

「可哀さうだけどもね、お天氣が惡いんだから仕方がない、こんな日に出掛けて途中で雪にでも降られて御覽なさい、それこそ大困りですからねえ、お家であつたかくして遊びませうよ。」

と、おやさしく花枝さんの冷たくなつたお手々を、御自分のお手でもみながら、溫めて下さいます。

花枝さんも、もう何處へも行き度くない、母樣と斯樣してお家で遊んだ方が好いと思ひました。

「だけども母樣、本當に今日雪が降ること？」

花枝さんは雪降りが大好きです。

「降りますとも、御覽なさい、空一杯あんなに入道雲が出てるでせう。」

母樣がお指しになるのを、障子のガラス越しに見ますと、眞黑な怖いやうな雲が、白つぽい、どんよりした灰色の空を、はしからはしから呑むやうにして、わくわくと頭をもち上げて參ります。

「入道雲つて、雪と御親類？」

花枝さんが訊きますと。母樣は笑つてしまつて、

「眞黑でせう、だけども怖くもどうもないのよ、ねえ、ソラ御覽なさい、もう何處かへ行つて了つたでせう。」

花枝さんが怖々ガラスをのぞくと、本當に黑い雲は遠くの方へ走つて行つて居ます。

と、恰度その時、前栽の横手に植つた篠笹の葉が、急にサラサラと音がして、雪あられがバラバラ降つて來ました。

「アラ雪よ、母樣！」

花枝さんはうれしくつて堪りません、いき

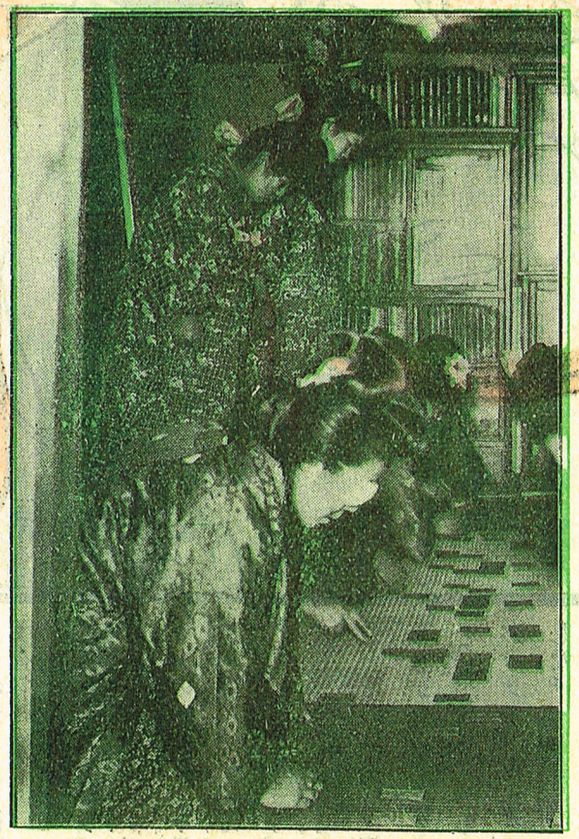
なりお庭へ駈け出さうとしますと、母樣はケープをきせかけて下さつて、「すぐ歸つてらつしやい、餘り長くおもてに居ると、お風をひきますよ。」と、御注意なさいました。

「えゝ直ぐよ。」

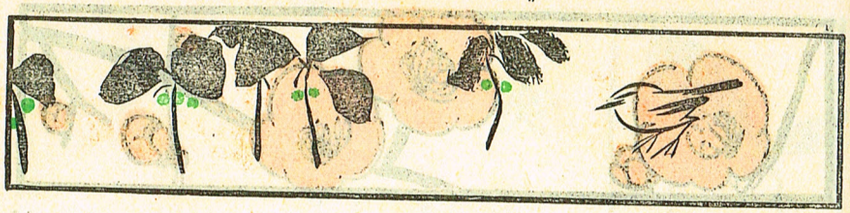
ですけども、花枝さんは面白くつて〳〵お庭の椿の葉蔭にしよんぼり翼をすぼめて、チャブイ　チャブイ、チャブイ、チャブイと、鳴いてばかり居る百舌や雀の生地のないのが可笑しい位です。

「雪やこん〳〵、霰やこん〳〵、雪や降れ〳〵、降れ〳〵あゝられ——」

口から出まかせのお歌をうたつて、牡丹色の前垂をうけて走りますと、見る間に眞白く雪が



カルタ會の一部



溜つて、その美しさと云つたらありません。

「サアサア花枝さん、もうお家へお歸んなさいよ。」

母樣はまた、花枝さんがお風をひきはしないかと心配してお呼びになりましたが、

「その代り母樣が雪細工をしてあげませうね。」

と仰有つて、御自分も手傳つて、大きなお盆に山盛り一杯雪を拾つて下さいました。

「解細工つて何、お母樣？」

茶の間のお炬燵に暖りながら花枝さんは、雪を握つては固め〳〵、大きいのや小さいのや、種種な形をお造へになる母樣のお手の中を不思議さうに見入つて訊きました。

「まあ〳〵見てらつしやい。」

母樣は默つてずん〳〵お拵へになります。やがて長いお耳が出來て、可愛いお口が出來て眞赤な南天の實を二つ、ぽつちりお目々の處へおつけになつた時には、花枝さんにも何だか解りました。

「アラ雪兎！」

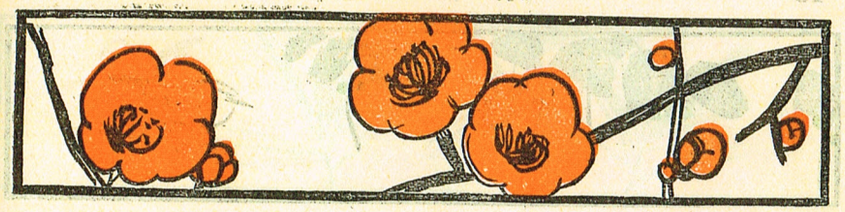
「さうですよ、可愛いでせう、だつこしておやりなさい。」

だつて冷たいんですもの、雪のだもの。

「それぢやお嫌ひ……」

「アラ母樣、好きですわ、大好きなのよ、だからあたし、此處んところへ寢かしますわ。」

花枝さんは自分の横へ持つて來て、お盆にのせたまゝ座蒲團をしかせてやりましたが、雪兎



が風をひくといけないと思つて、お炬燵の傍へ引寄せました。

「うさぎ〳〵お寢んねなさいよ、
寢る兒は好い兒、寢ない兒は馬鹿。」

花枝さんの癖の出まかせ歌を歌つて添乳をして居ましたが、好い氣持にお炬燵であたゝまつて、花枝さんはいつの間にか、うと〳〵寢こんでしまひました。

「うさぎ〳〵、お寢んねなさい、
寢る兒は好い兒、寢ない兒は馬鹿だ。」

花枝さんが寢ぼけて、雪兎のお脊を叩きますと、冷たいものがビッチャリとお手々ついたので、驚ろいて眼を覺して見ると、そこいら一面水がこぼれて、雪兎は何處へ行つたものか、居なくなつて見えません。

「アラまあ甚い！雪兎つたらまあ、おしつこしてさ、極りが惡いもんだから、屹度逃げ出したんだわ。」

花枝さんは全く吃驚してしまひました。

「お母樣、ほんとに兎はきまりが惡くなつたから、逃げたんですわねえ。」

お母樣はたゞ笑つてばかりいらッしやいました。

（美知代）